

かやぶきの里

美山町内には 200 軒以上の伝統的な茅葺き屋根の建物がある。なかでも「かやぶきの里」は、緑豊かな山並みを背景に、農地を望む丘陵地に約 40 棟の茅葺き民家が建ち並ぶ集落だ。

家々の間を縫うように歩くと、復元された 19 世紀の農家を利用した美山民俗資料館があり、この地域の伝統建築を内部から見る数少ない場所となっている。また、1796 年に建てられた現存するかやぶきの里で最古の邸宅も「ちいさな藍美術館」として一般公開されている。かやぶきの里は美山で最も多くの人を訪れる場所で、毎年、「雪灯廊」などのイベントも開催される。英語ガイドの案内で、村の歴史や文化について詳しく知ることができる。

歴史的な家屋や伝統的な環境は、住民の努力によって守られ、集落が活気のある生活共同体として存続できるよう、力を合わせている。かやぶきの里は 1993 年に伝統的建造物群保存地区に指定され、伝統的な建造物の保全が義務づけられたことで保存されるようになった。そのため、定期的に屋根の葺き替えを行うなど、維持管理を徹底している。その費用と地元の若者の雇用を確保するために、かやぶきの里の住民が共同出資して、集落内でレストランや土産物店などを経営する会社を設立している。

かやぶきの里の茅葺き屋根の家屋は、ほとんどが築 150～200 年である。数十年に一度、家ごとに葺き替えを行うが、葺き替えに使うススキを育てるところから始まる手間のかかる仕事である。かつては各戸に専用の茅場があったが、現在は由良川を挟んだ対岸にある畑を共同で使用している。雪が降る前の晩秋に刈り取ったススキは、束ねて冬の間天日干しし、翌年の春から室内に保管する。農家の屋根裏は昔、草の貯蔵庫を兼ねていたが、現在は共同倉庫を利用している。

茅葺き作業は、かつては村人総出で行っていたが、現在は地元産のススキを使い、春から夏にかけて専門家が行っている。屋根の茅は肥料として再利用することができる。大きな家では、片方をその年に、もう片方を翌年にと、部分的に葺き替えをすることもある。